芦名定道著

『自然神学再考——近代世界とキリスト教——』

晃洋書房 二〇〇七年二月二八日刊

A 5判 iii+二九八+三五頁 六七〇〇円+税

田 中 裕

本書のテーマは、序章で著者が述べているように「自然神学から近代を問う」ことである。それは、キリスト教にとって近代とは何であったのかという根本的な問いと重なるものであり、西欧近代を特徴づける宗教改革と自然科学の成立、それにとりもなう近代的な自然観・社会観とキリスト教との間の相互関係を問うことに他ならない。この問いに答えるために、著者は考察の焦点をキリスト教の「自然神学」に合わせ、近代の「自然科学」を生み出す一つの要因でありながらも、それとは厳しく対立する側面をも併せ持つキリスト教が、近代の形成と展開にどのように寄与したかを論じている。本書の構成は次の通りである。

序章 自然神学から近代を問う

第一部 自然神学の歴史的展開

第一章 古代キリスト教神学の成立と自然神学

第二章 キリスト教思想の展開と自然神学

第二部 近代世界の成立とニュートン主義の自然神学

第三章 近代キリスト教世界とニュートン

第四章 ニュートン主義の自然神学とその社会的機能

第五章 一八世紀 自然神学からの離脱

第三部 現代と自然神学の可能性

第六章 自然神学の生命論と進化論

第七章 自然神学と環境論

終章 自然神学の可能性

付論 モデル論とエコロジーの神学

著者の考察は、主として、プロテスタントのキリスト教と近代自然科学との関わりを論じることに向けられている。正統信仰的で国家教会的な「古プロテスタントイズム」と近代的思维によつて多面的に浸透された「新プロテスタントイズム」を明確に区別するエルンスト・トレルチの議論を踏まえつつ、それと並行して、マーガレット・ジェイコブに代表される科学史家の視座、とくに、一七世紀末より一八世紀にかけて近代化の先陣を切っていた英国における科学の意味あるいは機能の変貌を重視する議論が参照されている。このようなキリスト教史ならびに科学史の先行的な議論を継承しつつ、著者は、本書の第二部で、とくにニュートンとその影響を受けた当時の英国での自然神学的議論とその社会的な機能を詳しく論じている。

自然神学という学科は、現代に於いてもカトリック系の大学の神学カリキュラムでは重要な位置づけをもっているが、プロテスタントイズムにおいては、カール・バルトのラジカルな

書評と紹介

「否」に典型的に見られるように、その意義を全面的に否認する傾向は、まだまだ根強いものである。自然と恩寵を対比させるキリスト教的なバックグラウンドの乏しいわが国においては、「自然神学」という用語自体、それが、積極的に何を意味するかについて十分な理解が得られているとは言い難い。「自然」と「人為」を対比させる思考法は、古代ギリシャにおいても東アジアの思想に於いてもなじみのあるものであるが、かかる人為を超えた客観的実在としての自然概念だけでは、「自然神学」は成立しない。そのような自然をさらにもう一段階超えた超自然的なるもの、すなわち「ありてあるもの」(出エジプト記で啓示された神の御名)を究極の「実在」と見なす観点にたつことが、キリスト教的な意味での神学の核心にあった。すなわち人為とともに自然をも超える神、「天地の創造主」を唯一の主として信じるキリスト教の神観を前提としてはじめて、「自然神学」が西欧の精神史に於いて果たした歴史的・文化的な意味が明らかになるのである。かつて有賀鐵太郎は、ヘブル思想に内在する存在了解をハヤトロギと呼び、それをギリシャ哲学のオントロギアと対比させつつ、両者の間の緊張(トノス)の場においてキリスト教思想の成立を論じたが、著者もまた、「自然神学をこのトノスにおいて形成された思想として位置づける」(二三頁)ことを意図しつつ、さらに有賀のいう「ハヤトロギアのエクレシヤ構造」という概念を第二部の近代世界に於けるニュートン主義者達の議論にも適用し、自然神学を社会的存在としての人間の問いとして、キリスト教思想のコミュニケーション合理性の問題としてとらえるヤロスラフ・ペ

リカンの議論を手引きとして自然神学の意味を再考している。著者が本書の第一部「自然神学の歴史的展開―古代から宗教改革へ―」の冒頭で指摘しているように、キリスト教神学は、神的なる者に関する古代ギリシャおよびその影響のもとにあつたヘレニズムの思想家達の哲学的な宗教批判を重要な媒介として成立したものであり、自然神学という用語自体、神話神学、国家神学と並ぶ神学の三類型の一つを表すものであった。アウグスチヌスの議論も異教徒の哲学者ウアルロの議論を下敷きとしているが、伝承された神話を母胎としつつ民衆の間に根付いている「神話神学」や、国家の祭儀と深く結びついた「国家神学」に対して、それらとは別された哲学的な神学が「自然神学」と呼ばれていた。評者は、芦名氏のこの章の議論に触発されて改めてアウグスチヌスの『神の国』の議論を読み直したが、そこに「神話」「国家」「自然」という神学の三領域を批判しつつ超えるキリスト教神学の古典的なありかたを再確認することが出来た。この例に限らず、芦名氏の著作は、自然神学の伝統に関する豊富な注釈と引用文献によって、読者をおおいに裨益する著作であることは保証できる。

第二部のテーマは「近代世界の成立とニュートン主義の自然神学」であるが、この部分は、二十世紀になってから発見される注目されるようになったニュートンの自然神学と聖書神学に関する遺稿群についての最近の研究成果が取り入れられている。ニュートンが三位一体論を受け入れぬ非正統的なキリスト教徒であったことはすでに知られていた事柄であるが、それは彼自身のような神学思想に由来するものであるのかを著者は、

ウェストフアールやマニエル等の研究者の著作を参照しつつ論じている。ニュートンの遺稿群を分析すれば、神が科学的哲学的議論の中で論理的に要請された存在者ではなく人格的感性の対応者であり、ニュートンの宗教が神の命令（神への愛と隣人愛）への服従の宗教であったこと、ニュートンが人格的な神への信仰と自らの罪を深刻に告白していることが読みとれるが、ニュートンの三位一体論批判もそういう観点から理解すべきであると著者は云っている。また、本書にはニュートンのキリスト論やダニエル書の読解をつうじて伺えるニュートンの終末論の紹介もあるが、著者は、基本的にニュートンの神は「自然と歴史を支配する唯一の神であるが、決して無秩序や混乱の神ではなく、秩序の神であった」と見なし、千年王国的な急進主義にもとづく終末論とは一線を画することを指摘している。

本書の第二部では、ニュートンの思想に基づいて自然神学的な議論を展開した思想家、とくにポイル・レクチャーをおこなったリチャード・ベントリーの「世界の起原と枠組みからの無神論論駁」が詳しく分析されている。これはその当時の最新の科学的知見をもちいて神の存在論証を行いそれによって無神論を論駁することを意図したものであった。ベントリーの議論は、無神論者と共通の前提として原子論と万有引力および真空の存在を認めた上で、重力なしにカオスから世界システムの生成を説明するタイプの無神論と、重力によってカオスから世界システムの生成を説明する無神論を論駁し、「現在の組織（世界システムの）は物質的原因の必然性や想像上の偶然という目的のない混乱から生じたものではなく、知性的で善なる存在者

から生じたのであり、この存在者は現在の組織を選択と計画性によって特定のしかたで形成した」と結論する。著者は、この種の自然神学が社会的に影響力を持った背景として十七世紀のキリスト教の広教主義に注目する。清教徒革命から王政復古、そして名譽革命にいたる激動期を経験した後の英国国教会のなかの高教主義は、宗教的寛容と理性を重んじることによって、千年王国的な靈的熱狂主義や無神論的な自由思想に対して、自然の秩序とともに社会の秩序の賦与者としての神を強調することによって、教会と国家に於ける保守と革新の間の中道を志向していた。ニュートンの自然哲学もそれに影響されたポイル・レクチャーの自然神学もともにこのような広教主義を背景にしており、それは資本主義経済学の父祖であったアダムスミスの道徳哲学の背景にあった自然神学と軌を一にするものであった。

世界秩序の存在から神の存在を論証し、次にその神の支配から社会秩序を正当化するという論理形式をもっていたニュートン主義の自然神学は、しかしながら、社会システムの世俗化の過程が進行すると共に、その信憑性と有効性が次第に失われていく。これは科学史家の村上陽一郎が「聖俗革命」という用語で表現した事態でもあるが、芦名氏もまた、第二部第五章で、近代システムの自立によって、十八世紀以降、近代世界が自然神学から離脱し始める経緯を、三つの観点―実証主義的科学への移行、キリスト教的正統神学あるいは進行復興運動からの批判、自然神学への哲学的批判から概観している。このうち最後の者、すなわち、ヒュームの懐疑主義、カントの批判哲学を経

書評と紹介

た現代に於いて、自然神学は如何なる意味を持ちうるであろうかという問題を受けて、著者は第三部で「現代と自然神学の可能性」というテーマを論じている。そこでは、まず生命論と進化論の問題、次に環境論の問題が取りあげられている。

十九世紀に於いて自然神学的な問題は、生物学の領域に於ける進化論の出現によって新しい局面を迎える。著者は、ジョン・レイの「創造の御業に顕れた神の智慧」にみられるような典型的な自然神学思想が、十九世紀初頭まで、イギリスの知的学問世界において揺るぎない地位を保持していたことを確認した後で、進化論と自然神学の問題を論じている。

変異と自然選択によって生物の環境に対する適応を説明する進化論に対するキリスト教の応答を、「進化論対創造論」という対立図式に要約することが一般的であるが、著者はそのようなイデオロギー的な対立を吟味し、進化論で問われている神の問題が、単にキリスト教文化圏、あるいはアメリカの原理主義的なキリスト教のイデオロギー論争ではなく、もっと普遍的な問題であり、「自然科学と価値・意味・規範との関係性」を問うものであったことを確認している。科学的理論としてその正当性を主張する進化論自体に、いかなる価値や規範を結びつけることが可能になるのか、それは、生命や人間のあり方、とくにその変化の方向性について如何なる態度をとるかという問題である。そのことは、本書の第七章で取りあげられた「自然科学と環境論」の中心的なテーマでもある。

著者は、まず、リン・ホワイトによって提起された問題、すなわち現代の環境破壊のイデオロギー的責任を旧約聖書の創造

論にまで遡らせる主張が検討されている。著者は、この問題提起の典拠となった「地の支配」という創世記の祭司資料のテキストだけではなく、ヤハウイスト資料の平行記事をも参照した上で、「地の支配」は同時に「地の僕」として大地に産み育てられ、他の生命体との同質性・連続性において存在すると共に、他の生命体との連帯性を有するものであることを指摘している。また、ノアの洪水物語に於いて神と契約を結ぶのは人間だけでなく、人間と他の生命体との連帯性が契約に含意されていることも指摘し、ホワイトの問題提起に対して否定的に答えている。そして、この「地の支配」と「地の僕」という二つのモデルを一つのビジョンに於いて統合するものとして、「神を知る知識で満たされた大地」を預言するイザヤ書十一章六―九節を引用している。イザヤの終末的ビジョンの中に示された「動物たちを導く子供」に、自然と他の生命体と連帯しつつ、自らに課せられた責任を果たす人間のあり方を読みとつてい

る。本書の終章は「自然神学の可能性」と題されているが、そこでは、「自然神学をコミュニケーション合理性」の問題として「再構築する」という著者の立場が次のような六つの論点に要約されている。

(一) キリスト教の自然神学に広義と狭義の二つの意味を区別する。広義の自然神学とはキリスト教神学が他の諸学科とコミュニケーションすることの可能なインターフェイスの全体を意味する。

(二) 狭義の自然神学、とくに神の存在の論証は、創造信仰を

前提とする思想的営みであり、啓示神学と諸学科との媒介を意図する。それは信仰のコンテクストを必要とする。

(三) 自然神学あるいは神の存在論証で問われているのは、信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題である。そのコミュニケーションは信仰共同体の内部と外部の双方に関わるものである。

(四) 自然神学による論証は無神論者の回心にかんしては無力である。信仰から論証への移行は自然に生じるが、その逆はそうではない。

(五) ニュートン主義の自然神学では重要な位置を占めていた「計画性からの神の存在論証」は、科学の進歩によってこれまでに繰り返し交替を余儀なくされてきた。キリスト教の合理性の根拠を示すためにこのタイプの議論に依拠することは、今日では望ましくない。

(六) 広義の自然神学が信仰の合理性に関わっている以上、その再構築は現代キリスト教思想にとって重要な課題の一つである。

著者は、さらに付論の「モデル論とエコロジーの神学」のなかで、現代に於ける自然神学の方法論的反省として、サリー・マクフェイグの議論を援用しつつ、「神学思想もそれが人間の営みである限り、隠喩的性格を免れることは出来ず、素朴實在論に基づく神学教説の教条主義的絶対化は不可能である」という意識を持つべきことを強調する。そして、著者は隠喩を消極的に捉えるのではなく、「新しい事態を自らの経験世界に媒介し、経験を拡張し変革する機能をもつもの」として、隠喩が神

学に於いて重要な機能を果たすことを述べた上で、キリスト教の伝統に含まれる隠喩・モデルの複数性に注目し、そのときどきのキリスト教が直面する状況の分析と、状況に対する応答がそこからなされるキリスト教的伝統の究極的規範の理解という見地から、如何なる隠喩・モデルを選択すべきかを考察している。

その場合、とくに現代の環境危機に対して適切に応答するには、世界に対して親密な仕方でも相互的に関わる人格的存在者としての神を、「世界を説得的に導き、世界の苦悩に共感しつつ気遣いしつつ救済の働きをなす神のイメージを前面に出す実在理解を促す隠喩的なモデルが必要であり、そういう試みの一つとして、著者は「神の身体としての世界」というマクフェイグの隠喩的モデルを紹介している。

芦名氏の著作は、日本ではいまだ包括的に論ぜられたことのない自然神学にかんする労作であり、評者も多くのことばを学ばせて頂いたが、さらにこの書の議論を日本において継承するためには、何が必要であるかを述べて書評の結びとしたい。

日本では「自然」という言葉を、物質的自然の総体として理解するのではなく、人間と世界のありかたを特徴づける根源語として使う伝統がある。「自然法爾」とは親鸞の浄土真宗では根源的な意味を持っていたが、そこでいう自然(じねん)は、実体的な存在概念ではなく、存在者の根源的な働きとあり方を指す語であり、名詞としてではなく副詞的・形容詞的に理解すべき語であった。本書に於いては西欧のキリスト教神学の歴史の中で自然神学の可能性が論じられたが、本書の考察を踏まえ

書評と紹介

てさらに論ずべき課題の一つは、非西欧的な文化の伝統を持つ日本人が、その固有の歴史的宗教的伝統と対話しつつ、西欧哲学に根強く残存する実体主義的自然観には還元されぬ独自の自然神学を構想することであろう。

松田真理子著

『統合失調症者のヌミノース体験』

——臨床心理学的アプローチ——

創元社 二〇〇六年九月二〇日刊

A5判 Xiii+229頁 二五〇〇円+税

森岡正芳

ヌミノースとは、宗教体験の根本に関わる宗教感情である。心理学研究の立場からも、ヌミノースが内包する中核感情をしつかり把握する必要がある。しかしながら、個人を超えた集合無意識を仮定する臨床心理学の一部を除いて、心理学ではほとんど主題化され得なかった。今回、松田の優れたモノグラフを拝見する機会を与えられ、オットーの『聖なるもの』をあらためて読み直すきっかけになり、よい機会を得た。^(注)

オットー『聖なるもの』は、きわめて独創的な感情心理学の古典としても読める。ヌミノースは深い純粹感情であり、感情によるアプリオリな認識として宗教体験の源泉である。オットーはそれを「魂の底」と表現している。ヌミノース感情の源泉となる事象は幅広い。オットーも「宗教以前」の呪術的なもの、アニミズム、靈魂崇拜、自然の畏怖すべき力、お伽噺などさまざまな領域からヌミノース感情の源泉をさぐる類似物を例示している。

オットーによればヌミノース感情の対象は明示できない。か